【会員投稿】

第３回・台湾李登輝学校研修団参加報告

（１０月２９日・土～１１月3日・水・祝）

石川台湾問題研究会代表
石川公弘（昭和３４年商研卒）

李登輝学校入学の記

第３回・台湾李登輝学校研修団の初顔合わせが、１０月１８日（火）午後２時３０分から、文京区民センターで開催された。今回の研修スケジュールは、１０月２９日から５泊６日、前半は嘉南大　見学などの野外研修、後半は桃園県の渇望学習センターでの座学が中心である。

総勢四十数名、防衛問題の専門家もいれば、台湾語研究の権威もいる。会社役員、地方議員、その他多士済々である。台湾に特別の関心をもつ女性も数人いる。李登輝さんが発表された「台湾の主張」を読んで、フアンになったという人が多い。私は歳のせいか、研修団長にさせられてしまった。

私が簡単な挨拶をした後、それぞれの人が自己紹介をしていたところへ、許世楷駐日大使が李文化部長を伴って来会され、次の要旨の挨拶をされた。

「戦後、長い間独裁政権の下に苦しんでいた台湾は、１９９０年代になって民主化され、世界の歴史の主流に入ることができた。独裁国家中国は、経済的に発展しているものの、世界の歴史の流れの中では逆流である。日本は１９４５年以来、世界歴史の主流である民主化の道を歩んでいる。台湾も今、自信をもって民主化の道を歩んでいる。逆流することはありえない。

中国はよく日本のことを「軍国主義化」と非難するが、私はそれを逆に批判している。１９４５年以来、日本は一度も戦争をしたことはないし、戦争をすると言ったこともない。平和国家に徹している。
他国を軍国主義と非難する中国が、逆に何回も周辺の国と戦争をしている。中でもベトナムを懲罰するとして仕掛けた戦争は、完全に侵略戦争である。台湾に対しても、最近「反国家分裂法」を成立させて恫喝している。

日本はアジアにおいて中国と対抗できる唯一の国である。靖国神社を中国が問題にするのは、外交カードとしてであって、本心は日本を自分たちより優位に立たせたくないのである。
日本の財界人で、中国の言い出している東アジア共同体に、賛意を表す人がいるが、どうかと思う。中国の本心はアメリカ外しであり、日本の孤立化である。そのために、韓国を反米反日にし、更にその輪の中へ台湾を引き込もうとしている。先日、靖国神社へ抗議行動に来た台湾の高金素梅立法委員は、帰国早々、北京へ出向いている。これなども、日本孤立化の一環として彼女が動いている証拠であろう。

親日的な台湾日本語世代も、七十代でこれからは段々と数が少なくなる。それに代わるものは、台湾の大学で日本語を学ぶ学生である。台湾では日本語を学ぶ学生が英語に次いで多い。今後の日台友好は、ここを拠点に進めるのがよいと思う。」

李登輝さんと夕焼け小焼け

私たちは、研修第一日目、台南の田舎にある台湾李登輝友の会総会長、黄崑虎先生のお宅に伺い、８０年前に建築された台湾の歴史的建築を見学した。それは前庭、中庭、後庭の四

合院というロの字型の見事な大邸宅だった。豪華な食事と、独特のテンポの山地族の踊りまで歌いながら披露してくれた黄夫人とその家族。ホスピタリティの見本を見る感じだった。

翌日は八田与一さんの世紀の大工事、嘉南大　を見学したが、黄会長は結婚式の主賓に招かれている身ながら、私たちの説明役を引き受けられ、現地を視察する私たちの船が小さくなるまで、丘の上から手を振って見送ってくれた。

独立連盟の会長・黄昭堂先生は、「日本と台湾の安全保障」という厳しいテーマを、ユーモアたっぷりに話してくれたが、私たちと真夜中まで真剣に語り合う姿にも、感銘を覚えたものである。大柄で威厳のある黄昭堂先生に、「今まで何回かお近づきになる機会があったのですが」と、私が名刺を差し出すと、「貴方のことは蔡焜燦氏からよく言われてきた」とのこと、蔡焜燦氏の気配りに参ってしまった。

だが、何と言っても決定打は、李登輝さんである。講演の内容はあらためて報告する。大きな声、ユーモアたっぷりの話題が示す柔らかい頭脳、８２歳にして、なお理想のたいまつを高く掲げて進むその姿に、誰もが台湾の将来と重ね合わせて、安堵を感じた。とくに参加者の誰もが感じたのは、この人のもつ優しさではないかと思う。

李登輝さんは言った。「昨夜、夜中に目覚めて、家内と“夕焼け小焼け”を歌ったんだ。日本の歌は素晴らしい。自然と人間と動物が融合している。日本以外に、こんな素晴らしい歌があるだろうか」と。とても優しい顔だった。私たちはそのとき、それぞれが、歌の情景を心に描いていた。

夕焼け小焼けで　日が暮れて
山のお寺の　鐘が鳴る
おててつないで　皆帰ろう
カラスも一緒に　帰りましょう

キリスト教を信じ、鈴木大拙の禅の心を論じ、夜中に夫婦で「夕焼け小焼け」を歌う人を、どこかの大国は、「トラブルメーカー」とか「戦争仕掛け人」と呼んでいる。とんでもない言いがかりだ。握手した前総統の手は大きかったが、柔らかくとても温かかった。私たちは、この大人物の長寿を、台湾のためにも、また日本のためにも、祈らずにはいられない。（以下、李登輝学校の座学の中で、特に印象深かったものを報告します。）

台湾戦後世代の日本観

李登輝学校最初の座学は、台湾大学・呉密察先生の「台湾の歴史を知る」という授業だった。呉先生は１９５６年生まれ、今や盛りの現役世代である。この授業からは、いろいろ面白い見方を教わった。

日本統治以前の台湾は、インフラといえるものはなかった。まともな道路一本なかった。清朝はできるだけ小さな政府を目指し、裁判も治安も自分たちで解決させていた。その代わり、税金も納めなくてよい。日本は機能する政府を作った。道路、港湾を作った。台湾に、はじめて政府らしい政府をつくった。

教育の普及はもちろん評価はする。しかしその教育は、工業、商業、医学などの実学に傾き、普通教育は極端に少なかった。台湾は、物質的な豊かさを得たが、逆に戦争や共同体の喪失が結果する孤独も経験した。全てがよかったわけではない。

このような台湾史の話も興味深かったが、先生が述べる台湾日本語世代への見方が、私は特に面白かった。呉先生によると、戦後世代から見て、台湾の日本語世代は「ちょっと変」

だと言う。日本に弱いというのだ。もっと対等につきあわねばならない。日本との関係を正常化しなくてはいけない。平等対等の関係こそ望ましいというのである。

日本に対する感情面の親近感はあまりない。ある意味で当然かもしれない。日本政府は、深い親日感情を持つ日本語世代のいる台湾を、ことごとく冷たくあしらってきた。それを見ている戦後世代が、日本を慕う世代を見て、変だとおもうのは当然かもしれない。今の現役世代は日本語ができない。日本語世代との間では可能だった、以心伝心などは期待すべくもないのである。

台湾の親日感情は、日本の統治の後にやってきた外来政権があまりにも悪すぎたので、日本はその恩恵に浴しているらしい。とにかく悪すぎた。やってきた連中でさえ、悪すぎたと言っているそうだ。

先生は、戦後の外来政権に対して、その暴政を強いた国民党政権に対して、台湾はまだその清算を果たしていないと言う。復讐でなく清算が必要である。その清算なくして、台湾人は正しい歴史認識を持つことはできない。国民の質の向上には、これが欠かせないと言う。

私は思う。日本語世代の時代は曲がりなりにも一つの国であった。そこでは同化が前提であり、それが価値であったが、そこには有形無形の差別があった。戦後世代の時代は、二つの国と国との関係であり、平等・対等が価値であるのに、それを妨げる大きな障壁がある。大国の存在を恐れて、平等・対等どころか無視の関係に近い。

私は台湾日本語世代のやさしさに触れるたびに、現在のような民主化された日本に、彼らと何の差別感もなく、共に生きてみたかったとしみじみ思う。しかし、時計の針を逆転することはできない。叶わぬ夢である。いま我々に出来るのは、国家としての台湾と正常な付き合うことであり、台湾人をその国民として正当に遇することに尽きると思う。

台湾が守るバシー海峡の自由航行

李登輝学校の受講者に大きな感銘を与えた講義に、黄昭堂独立連盟総裁の「台湾と日本の安全保障論」がある。台湾の民主化は、外からの圧力と内からの人民の反抗がうまく相俟って成功した。外からの圧力は、中国国民党の独裁に反抗し、パスポートを取り上げられながらも、決死の覚悟で民主化に尽力した台湾の留学生など多くの人々の力があった。その中核にいたのが、現台湾独立連盟の黄昭堂氏である。清濁併せ呑む人柄は、難しいまとめ役にぴったりだった。

台湾人民がその志をえたとき、李登輝前総統を建国の父と呼ぶなら、黄昭堂氏は建国の兄ぐらいに位置づけるだろうと、私は思う。先の総統選挙で、台湾の人々は北から南まで手をつなぎ台湾人の団結を誇示した。陳水扁総統の再選に大きな力を与えた２２８手護台湾運動である。その総指揮官も務め見事にそれを成功させたのも黄昭堂氏である。この人の話、談論風発、軽妙酒脱、李登輝さんの悪口を言って、そっと後ろを見るところなど、下手な噺家顔負けだ。

黄昭堂先生はまず、前回の立法委員選挙における与党の敗北から話を始めた。絶対勝つと思っていたが、やはり与党側に気のゆるみ、民進党と台湾独立連盟の票の食合いの中で、陳水扁氏が独自色を出そうとあせり、本来は独立連盟が言うような主張を強調してしまった。それを見てアメリカがあわて、慎重な日本までが選挙干渉ともいえるような動きにでた。そうした動きに、選挙民が敏感に反応したことなどを、敗因に挙げられていた。

黄昭堂氏は、日本と中国は、現在も将来も友好国にはなり得ないだろうと言う。両国の交流には友情などない、あるのは国益のみだと言う。スローガンが先走っている。岡倉天心は

「アジアは一つ」と言ったが、アジアには多様性がありすぎる。開発の遅れた国にＯＤＡを出しているが、これは多くの場合、汚職につながっている。本来、つり道具を与えてつりを教えなければならないのに、魚を与えたら釣りをする人はいなくなるものだ。

１９７０年代、東大に留学していたころ、研究室で戦前の新聞論調を調査したことがあった。１９４０年から１９４１年の朝日新聞には、「日本は何をぐづぐづしているのだ」という論調まであった。新聞が戦争を煽った部分もあり、それを国民も支持したのだ。一部の者の責任というわけにはいかないだろう。中国が怖くて、東南アジアの人々は沈黙を決め込んでいるが、先の戦争における日本の役割は、功罪相半ばしているのではないか。多くの植民地が独立できた。戦争だから当然、人は殺す。しかし日本軍が特に残虐だったとは言えない。

武士道は日本の道徳論とも言うべき存在だが、戦国時代でも天守閣が炎上すれば、それで戦いは終結した。それ以上、子や孫を殺す風習は日本にはない。中国の民族性は、強者をくじくのでなく、弱者をくじくにある。弱みや隙を見せれば、尖閣諸島ぐらい上陸してくるかもしれない。

台湾と日本は、アメリカとの連携を強めなければならない。日米関係が怪しくなるのは、台湾としても困る。しかし、台湾の日米に対する、特に日本に対する重要性も認識してもらわなければならない。台湾は、いまバシー海峡を守っている。ここを自由諸国の艦船が自由に航行できるのは、台湾が守っているからである。フィリッピンもあるが、あの国には作戦能力のある軍用機は３機ぐらいしかない。

もしも台湾が中国に領有されたたら、台湾海峡はもちろん、バシー海峡まで中国の内海となる。現在このバシー海峡を、１日に日本関係の大型船３００隻が航行し、日本経済を支える物流の７０％、２億トンの物資を運んでいる。

中国がこれに何らかの規制を加えたら、日本の繁栄は完全にストップしてしまうだろう。現在の物流の３０％をカットされたら、日本経済のレベルは戦前の水準に転落してしまうというデータさえある。正にバシー海峡は、日本経済の喉元である。
台湾の重要性と、日米台の連携がいかに必要かを痛感する講義であった。

中国は台湾の李登輝に学ぶべし

最終日は、李登輝校長自らの講義である。李登輝校長は「いま台湾も日本もふらふらしている。不安定である。国家的な苦難のときにある。国として団結が必要である。人民が期待している指導者とはいかなる者か、強い指導者には何が必要か。一方、国民にも「私は台湾の中の私」、「私は日本の中の私」がなければならない。

そして李登輝校長は、自身の人格形成の過程を実に率直に、事細かに話された。李登輝氏は、人生における二つの大事なことを、１５歳か１６歳の時から考えていた。一つは自我の問題。もう一つは死の問題。早くから自我意識が強く母親を心配させていたという。

座禅や苦行を通じて、自我制御を学んだ。自我を捨てようとして、人の嫌がる便所掃除もした。死とは何かも真剣に考えた。そして死の最も重要な意義は、「如何に生きるか」に尽きると考えるようになった。死を真剣に考えて、初めて肯定的な意義のある生が生まれる。立派に生きることができれば、死を怖れることはない。

しかし第二次世界大戦後、焼け野原と化した日本は何もかも破壊され、生活物資は極端に乏しかった。魂よりも食料問題、環境問題が大事だった。大きな社会変動を見て大きな感慨を覚え、それから１０年間は、唯物論の思想を遍歴した。社会主義への憧れも湧いてきた。だが社会経済が復興し、基盤整備が進むと、逆に心の虚しさを感じ、精神的な安定と満足を

求めるようになった。

李登輝氏は、自我の克服、生死問題の探求、終戦後の唯物論への転換と遍歴を経験したのち、ついに神の存在を探し始める。５年間をかけて、週五日、台北市内の数多くの教会を訪ね、神を探し回る。そして「私はだれだ」と問い続ける。そして「私とは私でない私、自我を徹底的に排除した私」だと気づく。ここに到着するまで、実に３５年間以上の時間がかかったという。自分の思想遍歴を、かくも率直に語る指導者の姿に、私は非常な親しみを覚えた。

李登輝さんの自分探しの旅は、厳しい求道の旅とでも言えるもので、凡人の私などの理解の限度を超えている。しかし私は、このように自己に厳しい人であって、初めて汚辱にまみれた中国国民党の政権構造から、新生台湾をスタートさせることができたのだと思う。自分が私欲にかられていたのでは、あのような見事な改革はできなかったはずだ。

自分に私欲がなければ、他人に私欲を捨てさせることができる。李登輝さんの国民党政権の構造改革は実に見事なものであった。民主の理想をあの汚泥の中に花開かせた。その実践力、行動力こそ、多くの人が賞賛して止まないものである。「国を治める者、まずその身を修める」という格言を正に実践した例と言えるのである。こう書いてくると、かた苦しい授業の印象を与えるが、実際は和気あいあい、教場はしばしば笑いにつつまれていた。

この授業より前に、私は台湾で李登輝革命のドキュメント映画を製作しているクルーの質問を受けた。質問は二つあった。第一の質問は、なぜはるばる台湾まできて、李登輝学校に学んでいるのか。李登輝さんのどこに魅力があり、どのような面を評価するのかということだった。それに対して私は、李登輝さんに見られる徹底的な理想追求の姿、その理想を現実の中で実践する行動力、実行するに当っての命懸けの勇気、それらの裏にあるこの大人物の人間的やさしさの４点をあげた。講義を受けて、その感をますます深くした。

第二の質問は、李登輝平和革命から、あなたは何を学ぶかというものであった。私は李登輝前総統の台湾無血革命から、多くのものを学ぶことができるが、今この無血革命を一番に学ばなくてはならないのは、汚濁にまみれている中国共産党政権であり、その下で苦吟している１３億の民衆ではないかと答えた。とっさに出た答えだったが、後で考えても自分ながらいい回答だったと思う。

銃口から生まれた政治権力が、その人脈を利用して企業経営も行い、その企業が公害によって自然を汚染しても、賄賂でもみ消したり、政治権力でそれを抑えたりしてしまう。司法も見て見ぬふりをする。司法までが、汚職の対象になる。人民に耳はあっても口はない。その共産党政権は、口を極めて李登輝氏を罵っているが、自ら省みることはない。罵る代わりに、謙虚に学ぶのが人民の為だと思うが、不可能なことであろう。

李登輝校長修業式の挨拶から

台湾李登輝学校第３回研修団の修業式に当たり、李登輝校長は次のような挨拶をされ、参加者一人ひとりに修了証を手渡したあと、固い握手を交わされた。

「石川先生、ならびに日本李登輝友の会の皆様、こんにちは。６日間の研修、たいへんご苦労様でした。今回は日本李登輝学校第３回目の研修ですが、このような台湾現地での研修を通じて、皆さんの台湾に対する認識が、よりいっそう高まったのではないかと思っています。

台湾と日本との関係は、歴史的に見ても、地理的に見ても、あるいは安全保障や経済の面から見ても、さらには両国民の感情の面から見ても、類例がないほど深いものがあります。

しかし残念ながら、両国の戦後の国家関係は非常にいびつな関係になっており、そのマイナスの影響もあらゆる分野で広がり、それはとても民間交流だけで補えるものではありません。

一番分かりやすい例としては、まず日本李登輝友の会が率先して取り上げ、積極的に取組んでいる、中学校社会科教科書の地図問題があります。

日本が中華人民共和国と国交を樹立したことに関し、台湾人としては何の異議もありません。ただその際に日本が、「台湾は中国の一部である」との中国の主張を、承認しないまでも、「理解し尊重する」と表明したことについては、やはり受け入れることはできません。

なぜなら、この日本の姿勢は、台湾人民に対しては、理解もしなければ尊重もしないということを意味するからです。さらに文部科学省は、この日本政府のスタンスを一歩踏み込み、台湾を中華人民共和国の領土とする地図帳の検定を、合格させたのです。

そもそも中国の主張は、善良な人々から財産を強奪することを正当化する、いわば強盗の主張です。日本政府は、武力で台湾を脅迫し併呑しようとする中国の野蛮行為を、理解し尊重し、教科書までが「台湾は中華人民共和国の一部だ」と日本人に植えつけようとしています。

これは、中国に台湾への侵略を正当化するもので、とても人権、自由、平等を掲げる平和愛好国家のなすべきことではありません。これは、日本政府の道徳上の汚点と言えないでしょうか。

真実と誠実を重んじることは、本来日本民族の根底にあるもので、台湾人の親日感情の原点は、その誠実な国民性に対する憧れとも言えるものです。しかし、台湾を中国の一部としてしまう教科書は、真実と誠実とはほど遠いものだと言わざるをえません。

もちろん、今の台湾社会も誠実と真実の社会ではありません。第一、中華民国体制を存続させていること自体が、国際社会にウソをつき続けていることなのです。なぜなら、中華民国・「リパブリック・オブ・チャイナ」自体が、「チャイナ」がついていて、「支那共和国」になっているのですから。

この虚偽の体制を改めることこそ、我々台湾人の急務であります。我々は中華人民共和国と対立しているだけでなく、内においても複雑な政治情勢に対処しています。この複雑な現状を、ぜひ理解してください。

今回のような研修で、皆様に台湾の現状がどのようなものかだけでなく、台湾および台湾人とは、どのような存在であるのか、また本来どのような存在になるべきかを理解していただけたら、この上ない喜びです。
台湾も日本も、民族の持つ本来の価値観を大切にしながら、ともに提携して前進できればと考えています。ありがとうございました。ぜひ、また台湾へおいで下さい。」

（本稿は私のブログ“台湾春秋”への報告を再編したものです。多少の不具合はお許しください）

http://blogs.yahoo.co.jp/kim123hiro/MYBLOG/yblog.html